

## 《書評》

# 『「ハーフ」ってなんだろう？： あなたと考えたいイメージと現実』

下地ローレンス吉孝\*著、平凡社、2021年

カツラ・シャハラ・バーヌ†

「ハーフ」について、わかりやすく中学生でも読める本を執筆する。そんな朗報とともに、著者の下地さんからその本に掲載するインタビューの依頼をいただいたとき、とても嬉しく思った。私自身、これまで記者などからインタビューを何度か受けたことがあるが、自分の経験を深く話すことは避けてきた。それは、マイノリティとしての体験が単に消費されることを恐れていたからだ。しかし、今回は学生のお世話になっている下地さんからの依頼であったため、安心して承諾した。インタビューでは、生い立ちからこれまでの間、しんどかったこと、辛かったこと、腹が立つこと、伝えたいことを話した。改めて、自分の中に多くの感情が、言語化されないままに堆積していたことに気づく機会となった<sup>1</sup>。

本稿では、日本で生まれ育ったひとりの「ハーフ」当事者としての私自身の立場性や経験に言及しつつ、本書『「ハーフ」ってなんだろう？：あなたと考えたいイメージと現実』のもつ意義を浮き彫りにしたい。

本書は以下の全5章からなり、複数の当事者に対するインタビューと著者による説明を交互に挟みながら「ハーフ」をめぐる社会問題を読み解いていく構成になっている。

- 第1章 「ハーフ」の問題は社会の問題なの？
- 第2章 それぞれの経験が複雑ってどういうこと？
- 第3章 「ハーフ」のイメージと現実は違うの？
- 第4章 「当たり前を問い直す」ってどういうこと？
- 第5章 メンタルヘルスについてどう向き合うといいの？

その内容は多岐に渡るため、全て網羅することはできないが、以下、各章で特に重要だと感じる

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員

† 海外ルーツ児童学習指導員  
shahlabaanu@gmail.com

<sup>1</sup> 評者へのインタビューは第4章に収録されている。なお、本稿で言及する評者の経験はインタビューには含まれておらず、本書を読みながら想起されたものである。

点を紹介する。

まず第1章では、本書のメッセージの核となる、「ハーフ」の問題を、個人の自己責任ではなく社会の問題として捉えるための前提知識が示される。「ハーフ」当事者の抱える問題は、日本社会に浸透した偏見、社会構造や歴史、制度など社会的背景と密接に結びついているということが、わかりやすく説明されている。

この章で最も印象深かったのが、アイデンティティにも強く影響する「ハーフ」「ミックス」などの呼称が「自己決定権」という概念で捉えられている点だ。自らをどう呼ぶ・呼ばないかは、他者ではなく自分自身に決定権がある。とてもシンプルで当たり前のことだが、あまりにも「ハーフ」や「ダブル」と好き勝手に名指される日常を生きてきた私は、この言葉にハッとした。

私も卒業論文で、「ハーフ」という呼称に関して9人の当事者にインタビューをした。「ハーフ」という言葉に対して当事者間でも肯定的、否定的、ニュートラルとさまざまな意見がみられた。それにもかかわらず、一般的には一方的に非当事者によってカテゴライズされ、社会の枠組みに当てはめられてしまうことが多い。だからこそ、目の前の相手が自分をどう表現するかをじっと待って、丁寧に耳を傾けることが求められるだろう。

本章では「ハーフ」の日常的な経験が当事者の声とともに紹介されているが、その一つが教育現場での教師や支援者による当事者の思いとはズレた対応や同調圧力である。本稿執筆中（2023年3月）にも、黒人系ルーツをもつ高校生が、正装として「コーンロウ」と呼ばれる伝統的な髪型で卒業式に出席しようとしたところ、学校側に認められず、別室に連れていかれたというニュースが話題になった。教育現場でこのような人権侵害が続いており、時代に即した教育のありかたの見直しが急務となっている。本章では、自分の髪型や髪色など、身体に対する自己決定権も尊重されるべきだということが述べられているが、教育現場においても不可欠な視点である。

第2章で著者は、「ハーフ」をひとくくりにし、わかりやすく伝える・考える行為は、本来あるはずの複雑性や多様性を覆い隠してしまう危険性があることを指摘する。当事者の複雑に絡み合った経験を解きほぐし理解するために、近年注目の高まる「インターセクショナリティ」という概念が用いられ、年齢、障害、出生地と育ち、文化的背景、民族的・人種的背景、ジェンダー、セクシャリティ、経済的状況、移動や歴史の背景、国の背景、宗教、名前等の複合的な被抑圧的経験が焦点化される。

私は、かつてある大学教員に「ハーフの経験なんて50人100人と聞いてもだいたい同じでしょ？」と言われたことがあるが、当然そのようなことはなく、本書のインタビューからは当事者の語りの中に、ひとつの要素に絞って捉えられるものはほとんどないことがわかる。「ハーフ」「ミックス」とカテゴライズできたとしても、そこには多様な個人が存在し、それぞれの人生を送っているのだということを本書は示している。複雑なものに複雑なままに向き合い、目の前の一人ひとりに関わるために、インターセクショナリティという概念はなくてはならない重要な視点となる。

第3章では「ハーフ」の歴史をたどり、戦後日本の社会的状況と「ハーフ」の歴史がいかに密接に結びついているかを考察している。歴史的資料を参照しながら、戦後「混血」と呼ばれた子どもたちが抱えていた深刻ないじめや差別の実態が示される<sup>2</sup>。この部分を読みながら「ハーフ」当事者として、残酷な歴史的事実に向き合うことのしんどさを感じた。その後、高度経済成長期に、アメリ

<sup>2</sup> 「混血」をめぐる歴史的背景についてのより詳細な説明は、下地（2018）を参照。

カに対するイメージの変化とともに「混血ブーム」が起きた。1970年代には「ハーフ」という言葉が誕生し、メディアによって「ハーフ」が商品化され始めた。一方で、「日本人」については単一のイメージが確立されていく。その結果、「ハーフ」は単一民族的な「日本人」という枠組みから除外されてきたのだという。このような歴史的背景は、「かっこいい」「かわいい」など、メディアが作り上げた良いイメージが覆い隠している現実を捉えるための、重要な知識だといえる。

第4章では差別とは何かを考えるために、不動産の入居拒否や就職活動での問題、警察による職務質問、SNSでの誹謗中傷などを例にあげ、「ハーフ」に対する人種差別が可視化される。

本章で特に興味深かったのは「アウトティング」についてである。アウトティングは、セクシャリティに関して用いられることが多いが、「ハーフ」も同様の経験をしている。それにもかかわらずこのことは多くの場合看過されていると著者は指摘する。私自身、大学生の頃から、友達が私を誰かに紹介するとき「ハーフでムスリムのバーヌ」と言われ、現在も「スリランカルーツのバーヌさん」と職場で紹介される。本書にあるように、「ハーフ」の出自やプライベートなことを本人の同意なしに勝手に広めることは、間違いなく人権にかかわる問題である。しかしこの問題はあまりにも「見えない」ものにされている。教育現場や支援現場だけではない。多文化共生を謳うさまざまな団体においても野放しにされている。

本来、自分のルーツや信仰を話そうが隠そうが私の自由であるはずだ。しかし、勝手に暴露され続けることがあまりにも「普通」の状況にいて、そのことの問題性を忘れかけていた。私たちの出自はアクセサリーではなく、大切なアイデンティティである。当事者ですら当たり前すぎて見過ごしてきたかもしれないこの問題について、私も警鐘を鳴らしていきたい。

この章では、こうした「ハーフ」が日常的に経験するにもかかわらず見えづらい問題が、「マイクロアグレッション」という概念で説明される。私自身、自分がこれまで無自覚なマジョリティによって悪意なくかけ続けられた言葉が「マイクロアグレッション」であると知ったのはここ数年のことである。その視点を得たことでようやく自分のしんどさを語り、マジョリティに対してツッコミをいれることができるようになった。しかし、非当事者からすれば、どういうことが当事者の負担に繋がるのかを想像するのは難しいだろう。その点本書は、マイクロアグレッションになりうる例を具体的かつ丁寧に説明している。こうした具体例を踏まえ、特権的立場にいる人が、苦痛を訴えた相手に耳を傾けること、相手の置かれた状況に対して想像力を持つことが大切だと著者はいう。そのための方法として、世の中に浸透している「当たり前」や「普通」、「常識」といったものを「問い直し」、身についた偏見を「学び捨てる」ことが提案されている。

第5章はメンタルヘルスの大切さがテーマとなっている。私が当事者に読んでほしいのは特にこの章だ。これまで見てきたような日常的なマイクロアグレッションや差別の経験は「ハーフ」当事者に対してメンタルヘルスにさまざまな深刻な問題を起こしうる。しかし、著者が述べるように、「ハーフ」や「ミックス」のメンタルヘルスに関する情報発信や支援は殆ど見られないのが現状である。

実際に私も、マイクロアグレッションの蓄積によって「うつ」を発症し、当時勤めていた職場を去らざるを得なくなったことがある。その際、マイノリティとして職場でしんどい思いをしたことを医師に話すと「それは仕方のないことだ」と言われた。私たち「ハーフ」はメンタルヘルスの問題を抱えやすいのに、適切な支援に繋がるのが困難だというジレンマを抱えている。心と身体を守りたくても助けを求めにいった先でさえ、マイクロアグレッションに遭うことも多々ある。

この章では、実際に「ハーフ」を対象にしたメンタルヘルスの情報発信や、カウンセリングに携わる数少ない当事者へのインタビューが綴られている。医療・支援機関へのアクセス、家族や友達など周囲の理解や第三の居場所の存在の大切さから、メンタルヘルスのためのサポートシステムや情報発信の必要性が語られている。同じ当事者として、今の子どもたちにあたたいメッセージも伝えてくれている。

ここまで見てきたように「中学生の質問箱」シリーズとして出版された本書は、わかりやすく、かつ丁寧に「ハーフ」当事者を取り巻く歴史や現状を描き出す、非常に重要な一冊となっている。本書は非当事者のマジョリティを主な読者として想定していると思われるが、非当事者だけではなく、当事者の親、そしてなにより「ハーフ」自身にとっても重要な内容だ。

当事者は家族からの無理解に悩むことも少なくない。本書は、当事者の親にとって、子どもたちが具体的にどのような問題を抱えているのかを理解する上で非常に重要な示唆をあたえる。また、ひとりでも多くの当事者に、本書で語られるようなしんどさやその原因が共有されたならば、現在当事者の各々が抱えている問題は少しでも軽減されるだろう。私自身の経験を振り返っても、小学生から中学生のとき、自分と同じ背景や想いを持つ人を必死に探していた。近年になってようやく「ハーフ」当事者の経験が徐々に共有されるようになったが、当時こんな本に出逢っていたらどれほど楽になっただろうか。

本書は教育者や支援者、非当事者のマジョリティに読んでほしいのはもちろんだが、何よりもひとりでも多くの当事者とそのすぐそばにいる当事者の親に届くものであってほしい。しかし、こうした読者を想定したとき、日本語の難しさという問題が生じる。

既に30年以上日本に住む私の父もそうだが、当事者の親の中には、漢字を読めない人も多い。例えば本書の内容を「やさしい日本語」にしたり、英語版などの多言語へ翻訳することで、日本語に精通していない、かつ読むべき人々に届けることも可能となるのではないか。

また、私は現在日本語教育に携わっているが、移動、家庭的環境、経済的環境、言語発達などによる要素から、一般的な子どもと比べると「ハーフ」当事者は言語習得が困難となる傾向が高いことが指摘されている。私も三言語が飛び交う家庭環境で育ったため、学校で国語はクラスで最下位を争うほどで、中学生になっても「この言葉どういう意味？」とよく友達に聞いていた。そういった子どものためにも本書にルビを追加したり、語彙の意味を一覧表にしたり、イラストや絵を増やしたり、小学生でも読めるような簡単な日本語にするなどといった工夫の余地があるのではないだろうか。

今後、こうした取り組みがなされることで、「ハーフ」一人ひとりの経験が、非当事者だけでなく当事者やその親にまでより広く届くようになることは間違いない。本書はそのための大きな一歩となる。この本が、多くの「ハーフ」と呼ばれる子どもたちが、問題に対する新たな視点を持ち、それぞれの心と身体を大事にするきっかけになることを願う。

## 参考文献

下地ローレンス吉孝 (2018) 『「混血」と「日本人」：ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』 青土社。